Tsukuba Psychological Research
2002, **24**, 203-210

児童の家族画を用いた「母親との愛着」の測定

筑波大学大学院(博)心理学研究科　本多　潤子

筑波大学心理学系　桜井　茂男

Assessment of attachment toward mother in middle childhood with family drawings

Junko Honda and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to develop an assessment of children's representational models of self and mother in family drawings. Participants were 9-12 year-olds in elementary schools. Drawings were scored using a series of specific signs in a previous study (Fury, Carlson & Sroufe, 1997) and several new signs. Two subscales which were "avoidance from mother" and "ambivalence toward mother", were developed. The results of this study support the use of children's drawings as a potentially robust measure for tapping into children's representational models of attachment toward mother during middle childhood in Japan. Two subscales with modified and expanded checklist of specific signs showed enough reliability and construct validity. Implications for future research were discussed.

Key words: attachment, middle childhood, family drawings

愛着理論では，乳幼児期の養育者への愛着が，生涯にわたって対人場面での認知や情動に影響を与えると主張されている．この機能は「内的作業モデル」とよばれている．内的作業モデルとは，愛着対象との持続的な相互交渉を通して人の内部に形成される，愛着対象および自己に関する心的表象である(Bowlby, 1973)．それは，スキーマと同様の働きをし，愛着に関する情報に対する注意，記憶，経験の評価などを方向づけるはたらきをする．

Bowlby (1973) によれば，内的作業モデルは，2種類の補完しあうモデルから構成されているという．すなわち，①「他者は自分の要求に対してどの程度応じてくれる存在なのか」という愛着対象に関するモデルと，②「自分は他者からどの程度受け入れられている存在なのか」という自己に関するモデルである．また Bartholomew (1990) によると，「愛着対象に関するモデル」は親密な関係からの回避の程度と関係するものであり，「自己に関するモデル」は他者から受容されることに対する依存の程度と関係しているものであるという．

このような内的作業モデルは一貫性を保ちながらも，発達にともなって変容する表象のネットワークである．そこで，発達にともなう内的作業モデルの変容について検討することが必要とされる．しかしながら児童期における検討はあまり行われていない(Solomon & George, 1999)．その原因は，おもに測定法が確立していない点にある．

これまでに，児童期の内的作業モデルを測定する方法はいくつか開発されている．Fury, Carlson & Sroufe (1997) は，家族画による児童の内的作業モデルの測定法を開発している．内的作業モデルの測定に家族画を用いる利点は，子どもの無意識の欲求，感情の状態，認知の仕方などを自然にとらえることができること (Koppitz, 1968) である．特に情緒的な問題を抱えている子どもの場合には，言語化が困難なため，描画は有効な手段となる．

家族画による愛着の測定をはじめて検討したのは，Kaplan & Main (1985) である．彼らの研究を

引き継いでFury et al.（1997）は，それまで検討されてきた指標を修正し，新たな測定法を開発した．Fury et al.（1997）による家族画を用いた愛着の測定法では，個別の指標と全般的な指標の2種類の指標によって家族画を評定している（Appendix 1参照）．そして，1つの個別的指標だけでは予測力は弱いが，個別的指標の合計や全般的な指標では予測力が高いことを示した．

本研究では，Fury et al.（1997）による評定法を基にして「母親との愛着」に関する指標を収集し，尺度の作成を試みる．そしてそれらの指標を用いて「母親からの回避性」（愛着対象に関するモデル）と「母親への両極性」（自己に関するモデル）の2つの下位尺度を作成する．母親との愛着を検討する理由は以下の2点である．まず母親との愛着は父親との愛着よりも将来の心理社会的機能を予測することが示されていること（van IJzendoorn, Sagi & Lambermon, 1992），特定の愛着対象との関係を評定することによって，臨床的介入もしやすくなると考えられること，である．

それぞれの下位尺度における指標選定の基準は，「愛着対象に関するモデル」（母親からの回避性）については，①母親の利用可能性の低さ（ストレス状況において母親を頼ることに対する抵抗，動機づけの低さ）と②母親の情緒的応答性の低さ（母親からの愛情，理解の低さ）の2点である．また「自己に関するモデル」（母親への両極性）の項目選択の基準は，①母親へのとらわれ（母親を過剰に求める傾向）と②母親からの評価懸念（母親から拒否されることへの不安）の2点である．

項目の選定は，2つの手続きによって行った．まず「母親からの回避性」「母親への両極性」に関係する指標をFury et al.（1997）による個別的指標より選定する．選定は上記の選定基準に基づいて行った．そしてそれらの指標を母親との愛着を示すように修正する．つぎに人物画テストの情緒的指標（Koppitz, 1968）のうち，それぞれの選定基準に適していると思われる指標を加える．さらに選定基準に適合すると思われる指標を独自に作成する．加える指標は「母親からの回避性」に関しては，他者に対する攻撃性，敵意との関係が認められている，①長すぎる腕（膝の下もしくは膝までとどくような長い手）が描かれている，②一本以上歯が描かれている，③部分の統合不全が認められる（1つあるいはそれ以上の部分が他の部分と結合していないか，部分が1本の線でかろうじてつながっている，またはほとんどくっついていない），の3つの指標である．さらに，④自分もしくは母親がうしろ向きに描かれている，という指標も加える．

「母親への両極性」に関しては，不適切感や無能感への罪悪感の反映とされている，①手が切断されている（手や指のない腕）を加えた．また②自分がポジティブな感情（笑顔）を示して描かれ，かつ母親と離れて描かれているという，母親への両価的な感情を示している指標を作成した．描画に表される「人物間の距離」は，心理的な距離を示すとされており，近距離はその人物との接近，同一視，依存を，遠距離は回避，離反，ときには敵意といった否定的感情が含まれると考えられている（加藤，1986）．そういったことからも②の指標は両価的な感情を示していると考えられる．

以上，「母親からの回避性」に関する10項目と「母親への両極性」に関する8項目の計18項目の指標を作成した．

本研究が先行研究と異なる点は以下の3点である．まず，教示の仕方に変更を加えた点である．先行研究では，教示は「家族を描いてください」のみである．しかし，本研究では動的家族画法の教示をとりいれ，「家族が何かをしているところを描いて下さい」とした．その理由は，静的な家族画よりも動的な家族画の方が家族内の力動的関係が明らかとなり，より愛着表象を反映した測定が可能である（日比，1986）と考えられるからである．つぎに本研究では，先行研究（8～9歳）よりも年齢の高い児童（9～12歳）を対象とし，異なった文化（米国と日本）の児童を対象にしている．3番目には，先行研究ではリスク要因をかかえた家族の子どもを対象としているが，本研究では一般の小学生を対象としている点である．

以上の3点を考慮し，「母親からの回避性」と「母親への両極性」示す指標から，2つ下位尺度を作成し，その信頼性・妥当性の検討を行う．

構成概念妥当性を検討するために，上記下位尺度と関連尺度との関係を検討する．つぎに下位尺度の独立性を検討したうえで，2つの下位尺度から構成される4つの愛着スタイルの妥当性も検討する．4つの愛着スタイルとは，Bartholomew & Horowitz（1991）によるもので，安定型（「母親からの回避性」「母親への両極性」ともに低い），とらわれ型（「母親からの回避性」は低く，「母親への両極性」は高い），愛着軽視型（「母親からの回避性」は高く，「母親への両極性」は低い），愛着恐怖型（「母親からの回避性」「母親への両極性」ともに高い）のことである．

実際に検討するのは，以下の5つの予測である．

予測1では，「母親に対する愛着」の質問紙尺度

における「回避性」および「両極性」下位尺度と，本研究で作成する家族画による「母親からの回避性」および「母親への両極性」下位尺度との間に正の相関が予想される．また愛着軽視型と愛着恐怖型は「回避性」得点が高く，とらわれ型と愛着恐怖型は「両極性」得点が高いと予想される．

予測2では，安定した愛着は共感の発達を促すものである（Sroufe, 1983）といわれることから，共感と愛着との関係を検討する．「母親からの回避性」とは負の相関が予想される．そして愛着軽視型が最も共感性が低いことが予想される．

予測3では，コンピテンスとの関係について検討する．成人においては，両極性の高い人はコンピテンスが低いことが示されている（Collins & Read, 1990）．そこで「両極性」とコンピテンスとは負の相関が予想される．また，「とらわれ型」と「愛着恐怖型」はコンピテンスが低いことが予想される．

予測4では，攻撃性との関係を検討する．回避性の高い人は敵意が高く，怒りを統制することが困難であるとされている（Miklincer, 1998）．したがって「母親からの回避性」は攻撃性と正の相関が予想される．さらに「愛着恐怖型」は他の愛着スタイルよりも攻撃性が高いことが予想される．

予測5では，対人不安傾向との関係を検討する．両極性の高い人は，常に愛着対象から見捨てられるのではないかという不安にさらされているため，不安傾向が高いとされる（Cassidy & Berlin, 1994）．そこで「母親への両極性」と対人不安傾向とは正の相関が予想される．したがって，とらわれ型，愛着恐怖型は他の2つのスタイルに比べて，対人不安傾向が高いことが予想される．

方　法

被調査者

川崎市の公立小学校2校の小学生207名（男子122名，女子85名）を対象とした．うちわけは，小学4年生87名（男子58名，女子29名），小学5年生73名（男子33名，女子40名），小学6年生47名（男子31名，女子16名）であった．

調査内容

家族画：教示は動的家族画法にならい，調査者もしくはクラス担任が，以下のとおり行った．「今からあなたの家族の絵をかいてください．あなたの家族の人たちが何かをしているところを描いてください．」また　描き終わった後で，それぞれの人物画の上に誰をあらわしているのかを鉛筆で記入してもらった．

妥当性を検討するための尺度：妥当性を検討するために，以下の5つの尺度を用いた．①児童の「母親に対する愛着」測定尺度（本多，2000）の修正版：2つの下位尺度（回避性，両極性）から構成され（15項目），回答形式は4段階評定であった．②児童用共感尺度（桜井，1986）：9項目の尺度で，回答形式は4段階評定であった．③児童用攻撃性尺度（桜井，1991）：児童の「内的な状態」としての攻撃性を測る尺度（14項目）で，回答形式は4段階評定であった．④認知されたコンピテンス測定尺度（桜井，1983）のうちの一般的自己価値（general self-worth）下位尺度：生活全般にわたる認知されたコンピテンスを測定しており，7項目から構成され，回答形式は2回の2件法による4段階評定であった．⑤対人不安傾向尺度（松尾・新井，1998）：児童の特性的な対人不安傾向を測定する尺度である．18項目からなり，「否定的評価懸念」（7項目），「情動的反応性」（6項目），「対人関与の苦痛」（5項目）の3つの下位尺度をもつ．回答形式はいずれも4段階評定であった．

調査用具

大きめの画用紙では子どもの抵抗が大きくなるため，A4版の画用紙を用いた．また色鉛筆は学校指定の12色の色鉛筆を用いた．

手続き

上記の調査を1999年6月中旬に，小学校の教室において調査者もしくはクラス担任が実施した．被調査者の描画活動を抑制しないように，描画中は，調査者もしくは教師が机間巡視は行わないことにした．15分経過したら，そのことを教示した．それまでに描いている様子のない者には，　絵は評価するためのものではないので，上手に描くことの必要がないことを説明し，描画を促した．20分たっても終わらない者については，10分延長し，30分以内に完成するように促した．

評定法

「母親からの回避性」に関する指標（10項目）と「母親への両極性」に関する指標（8項目）により評定を行った．評定に関しては，被調査者の生育暦についての知識がまったくない状態でブラインド評定にした．不一致の項目については，評定者間で話し合いがなされ，一致した見解が以後の分析に用いられた．

妥当性の検討

「母親からの回避性」指標と「母親への両極性」指標で2つの下位尺度を構成した．それぞれの下位尺度の得点は，各指標にチェックされた場合を2点，チェックされなかった場合を1点として，合計

Table 1　児童の「母親に対する愛着」測定指標の一致率

項目内容	一致率（%）
「母親からの回避性」	
1．家族の個別性が欠如している（大きさ，性別，色など）．	50
2．母親が描かれていない．	100
3．母親が侮辱されて描かれている．	100
4．母親が女性として描かれていない．	50
5．母親もしくは自分がネガティブな表情をしている．	78
6．色彩がなく、ほとんど黒で描かれている．	100
7．長すぎる腕が描かれている．	88
8．歯が描かれている．	94
9．部分の統合不全が認められる．	78
10．自分もしくは母親がうしろ向きに描かれている．	100
「母親への両極性」	
11．自己像が小さく描かれている（5 cm 以内）．	94
12．母親もしくは自分がページの端に描かれている．	74
13．背景が描かれていない．	94
14．腕がひたむきでぴったりと体に密着している．	90
15．母親と自分が極端に近接して描かれている．	82
16．自分と母親が障壁によって隔てられている．	74
17．手が切断されている．	83
18．ポジティブな感情を示しつつ母親と離れている．	81

$n=88$.

得点を求め算出した．それぞれ「母親からの回避性」下位尺度，「母親への両極性」下位尺度とする．そして「母親からの回避性」「母親への両極性」との関連が予想される5つの尺度を実施し，両下位尺度得点との相関係数を算出し，構成概念妥当性を検討した．

結果と考察

評定者間の一致率

調査者の他に3名の心理学専攻の大学院生に，全被調査者（219名）の家族画のうちの40%（88名）について評定を依頼した．88名の家族画は，8クラスの児童において出席番号が1番前の者から11名ずつとされた．また評定する際には，被調査者の情報を伏せて，その影響が出ないようにした．一致率を求めたところ，Table 1のようになった．

愛着スタイルの構成

両下位尺度の積率相関係数を求めたところ.09であり，有意ではなかった．下位尺度間の独立性が認められた．そこで両下位尺度を下位尺度得点の平均値（「母親からの回避性」1.16，「母親への両極性」1.18）によってそれぞれ上下にわけ，合わせて4つの愛着スタイルを設定した．それぞれの愛着スタイルの典型的な家族画をAppendix 2に示した．

構成概念妥当性の検討

両下位尺度と関連尺度との積率相関係数を算出した．その結果はTable 2のとおりである．「母親からの回避性」は共感と負の相関，攻撃性と正の相関を示した．また「母親への両極性」は対人不安傾向と正の相関を示した．コンピテンスとも負の相関を予測したが，これは支持されなかった．自己報告法と投影法という測定方法の違いによるところが大きいと思われる．それ以外では，予測は支持され構成概念妥当性はおおむね確認されたといえる．

また各尺度の性差や学年差が一定していないので，性と学年の要因を統制して偏相関係数を算出した．その結果もTable 2に示されている．この方法でも，おおむね予測は支持され，構成概念妥当性が確認されたといえる．

愛着スタイルについての構成概念妥当性の検討

つぎに愛着スタイルの妥当性を検討するために，一元配置の分散分析を行った結果，コンピテンス，対人不安傾向尺度の下位尺度である「否定的評価懸念」，「対人関与の苦痛」以外の全ての関連尺度において，愛着スタイル間の有意差が認められた（回避性：$F(3,200)=6.23$, $p<.01$；両極性：$F(3,201)=4.57$, $p<.01$；共感：$F(3,200)=7.97$, $p<.01$；コンピテンス：$F(3,179)=.19$, ns；攻撃性：$F(3,198)=2.43$, $p<.10$；対人不安傾向：$F(3,199)=2.54$,

Table 2　「母親からの回避性」「母親への両極性」下位尺度と関連尺度との相関係数

	愛着		共感	コンピテンス	攻撃性	対人不安[c]			
	回避性	両極性				否定的	情動的	関与	全体
「母親からの回避性」									
相関係数[a]	+.33**	−.14*	−.24**	−.01	.22**	−.04	−.08	.06	−.07
偏相関係数[b][d]	−.17*	−.06	.13†	.07	.02	.04	.06	.04	.06
「母親への両極性」									
相関係数[a]	.03	.17*	−.06	.00	.05	.04	.23**	.16*	.12†
偏相関係数[b][d]	.03	.17*	−.01	−.03	−.02	.14†	.26**	.09	.21**

†$p<.10$，*$p<.05$，**$p<.01$.

[a] 相関係数の $n=203$.

[b] 偏相関係数の $n=172$.

[c] 対人不安とは「対人不安傾向尺度」，否定的とは「否定的評価懸念」，情動的とは「情動的反応性」，関与とは「対人関与の苦痛」を示している．

[d] 偏相関係数は，性と学年の要因を統制している．

Table 3　愛着スタイル間の関連尺度平均得点の差

関連尺度	愛着スタイル (1) 安定型	(2) とらわれ型	(3) 愛着軽視型	(4) 愛着恐怖型	有意差 ($p<.05$)
回避性					
M	1.99	1.99	2.43	2.32	(3) > (1), (2)
SD	(.64)	(.65)	(.60)	(.66)	
n	80	48	44	32	
両極性					
M	2.21	2.23	1.84	2.31	(3) < (1), (4), (2)
SD	(.66)	(.59)	(.71)	(.61)	
n	80	48	45	32	
共感					
M	25.28	24.19	20.91	23.16	(3) < (1), (2)
SD	(5.27)	(4.11)	(4.71)	(5.95)	
n	78	47	45	31	
攻撃性					
M	30.35	29.93	32.72	33.51	
SD	(8.13)	(6.96)	(6.76)	(7.28)	
n	78	47	46	31	
コンピテンス					
M	16.51	16.9	16.92	16.96	
SD	(3.72)	(3.63)	(3.98)	(3.01)	
n	74	40	41	28	
対人不安傾向					
M	29.55	30.78	27.16	31.96	
SD	(8.36)	(7.80)	(6.87)	(9.60)	
n	80	47	44	32	
「否定的評価懸念」					
M	12.7	12.38	11.27	13.38	
SD	(4.34)	(3.93)	(4.15)	(4.80)	
n	80	47	44	32	
「情動的反応性」					
M	10.46	11.51	9.32	11.9	(3) < (2), (4)
SD	(3.91)	(3.66)	(2.83)	(3.81)	
n	80	47	44	31	
「対人関与の苦痛」					
M	6.47	6.89	6.57	6.72	
SD	(2.21)	(2.38)	(2.15)	(2.15)	
n	79	47	44	31	

$p<.10$；「否定的評価懸念」：$F(3,199)=1.70$, *ns*；「情動的反応性」：$F(3,198)=4.16$, $p<.01$；「対人関与の苦痛」：$F(3,197)=1.18$, *ns*）．そしてTukeyのHSD検定を用いて多重比較を行った．その結果は，各スタイルの平均および標準偏差とともに，Table 3に示されている．

予測は大筋で支持され，本尺度の妥当性および愛着スタイルの妥当性も確認された．唯一予測と異なったのは，コンピテンスについてである．その理由としては，自己報告法によって測定された意識的なコンピテンスと投影法によって測定された意識されにくい愛着表象との違いが考えられる．

まとめと今後の課題

本研究では，Fury et al.（1997）に基づき，家族画を用いて母親との愛着の測定法を開発した．測定法の信頼性と妥当性はおおむね確認された．残された課題は以下のとおりである．

第1には，信頼性に関して，評定者間の一致率をさらに高めることである．評定者間の話し合いから得られた視点の違いなどを考察しながら改善していく必要がある．

第2には，本研究では乳児期の「母親との愛着」との直接的な関係については検討されていないため，縦断的研究を用いて，基準関連妥当性の検討をすすめることである．

さらに，第3として描画に影響を与える可能性のある他の要因（心理的ストレス，情動調節機能，知能など）との弁別的妥当性についても検討していく必要があるだろう．

引用文献

Bartholomew, K.A. 1990 Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, **7**, 147-178.

Bartholomew, K.A., & Horowitz, L.M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 225-234.

Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss: Vol. 2. Separation*. New York: Basic Books.

Cassidy, J., & Berlin, J.L. 1994 The insecure/ambivalent pattern of attachment: Theory and research. *Child Development*, **65**, 971-991.

Collins, N.L., & Read, S.J. 1990 Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 64-663.

Fury, G.E., Carlson, E.A., & Sroufe, L.A. 1997 Children's representations of attachment at one year of age. *Child Development*, **62**, 891-905.

Kopittz, E.M. 1968 *Psychological evaluation of children's human figure drawing*. New York: Grune and Stratton.

本多潤子 2000 児童の母親に対する愛着の多重モデルの検討 筑波大学大学院心理学研究科中間論文（未公刊）

日比裕泰 1986 動的家族描画法（K-F-D）－家族画による人格理解－ ナカニシヤ出版.

加藤孝正 1986 動的家族画（KFD） 臨床描画研究Ⅰ 金剛出版

Kaplan, N., & Main, M. 1985 Internal representations of attachment at six years as indicated by family drawings and verbal responses to imagined separations. In M. Main (Chair), *Attachment: A move to the level of representation*. Symposium conducted at the biennial meeting of the Society for Research in Child Development, Tront.

Mikulincer, M. 1998 Adult attachment style and individual differences in functional versus dysfunctional experiences of anger. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 513-524.

松尾直博・新井邦二郎 1998 児童の対人不安傾向と公的自己意識，対人的自己効力感との関係 教育心理学研究，**46**，21-30.

桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス測定尺度（日本語版）の作成 教育心理学研究，**31**，245-249.

桜井茂男 1986 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究，**34**，342-346.

桜井茂男 1991 攻撃性と共感による攻撃行動と向社会的行動の予測—児童用の新攻撃性尺度を用いて－ 奈良教育大学紀要，**40**，223-233.

Solomon, J. & George, C. 1999 The place of disorganization in attachment theory: Linking classic observations with contemporary findings. In J. Solomon & C. George (Ed.), *Attachment disorganization*. New York: Guilford Press.

Sroufe, L.A. 1983 Infant-caregiver attachment and patterns of adaptation in preschool: The root of maladaptation and competence. In M. Perlmutter(Ed.), *The Minnesota Symposia on Child Psychology: Vol.16. Development and policy concerning with special needs* (pp.41-83). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

van IJzendoorn, M.H., Sagi, A. & Lambermon, M. 1992 The multiple caregiver paradox: Data from Holland and Isreal. In R.C. Pianta (Ed.), *New directions for child development: No.57. Beyond the parent: The role of other adults in children's lives* (pp.5-27). San Francisco: Jossey-Bass.

—2001. 9. 28 受稿—

Appendix 1　Fury et al.（1997）による家族画の個別的な指標と全般的な指標

個別的な指標

1．家族のメンバーの個別性が欠如している（大きさ，性別，色など）．
2．腕が下向きで体に密着して描かれている．
3．背景が家族のメンバー以外は描かれていない．
4．地平線がない，もしくは人物が地面から浮いている．
5．一つの人物像でも未完成なものがある．
6．人物が極端に近接して描かれ，寄りかかっていたり，重なり合っていたりする．
7．人物が障壁（バリア，人，もの，塀など）によって隔てられている．
8．人物像が小さい．
9．人物像が大きい．
10．人物がページの端のほうに（1/4におさまるくらい）描かれている．
11．体の柔らかい部分（腕，お腹，ももなど）が強調されて描かれている．
12．顔の特徴（口，鼻，目）が強調されて描かれている．
13．人物像が失敗して描かれたあとがある．
14．２頭身よりも大きく頭部が強調されて描かれている．
15．腕と手が（指など）強調されて描かれている．
16．全体的に色が少なく，ほとんど黒で描かれている．
17．母親もしくは自分（子ども）が描かれていない．
18．家族のメンバーが侮辱されて描かれている（鬼婆，動物にされているなど）．
19．絵の中で母親が女性として描かれていない．
20．男性と女性が髪の毛，洋服などで性別化されて描かれていない．
21．母親が自分と離れて描かれている（人物が２人以上はいっている，ページの4/1以上離れているなど）．
22．人物がしゃがんでいたり，うずくまっているように描かれている．
23．ネガティブもしくはニュートラルな表情を全員がしている．
24．奇妙なサイン，象徴，状況（血の川，鬼婆，鋭い歯など）が描かれている．

全般的な指標

1．生命力・創造性（Vitality / Creativity）
2．家族の幸福感（Family Pride / Happiness）
3．脆弱性（Vulnerability）
4．情緒的隔たり（Emotional Distance）
5．緊張・怒り（Tension / Anger）
6．役割逆転（Role-Reversal）
7．奇妙さ・解離（Bizarre / Dissociation）
8．全般的な病理的指標（Global Pathology）

Appendix 2　各愛着スタイルにおいて特徴的な家族画

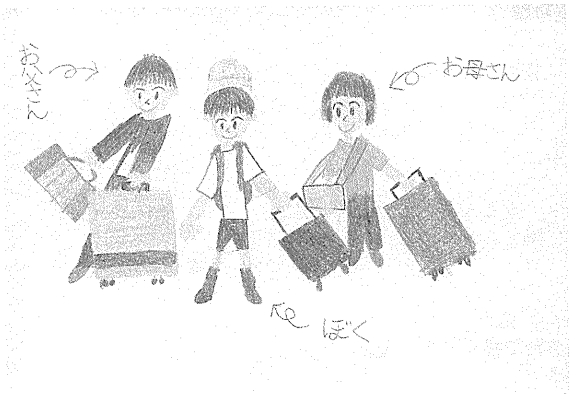

Fig. 1　安定型の家族画

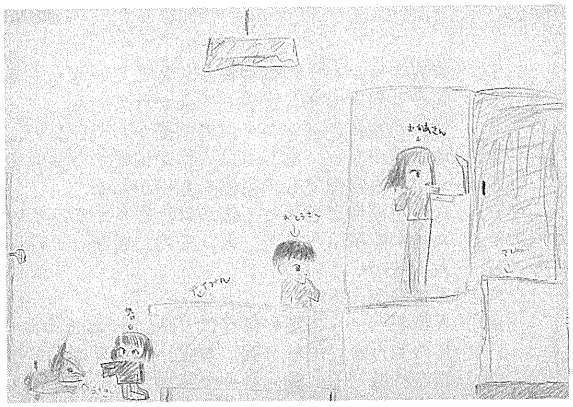

Fig. 2　とらわれ型の家族画

Fig. 3　愛着回避型の家族画

Fig. 4　愛着恐怖型の家族画